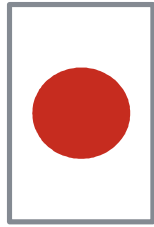


『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』未来はそれほど悪くない

2019年10月 眞鍋由比



「シンパシー（同情）」と「エンパシー（共感）」の違いは以前図書館だよりでもとりあげました。このブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』新潮社 2019 にでてくる中1の息子さんはあっさりと言っている。「自分で誰かの靴を履いてみること」。彼は日本人の著者を母に、元銀行員だけど辞めて前からやりたかったトラック運転手をやっているアイルランド人の父を持ち、イギリス・ブライトンの元底辺校の公立中学に入学して、毎日さまざまな人種の中でもまれながら暮らしています。「シチズンシップ・エデュケーション」という科目の期末試験の問題での「エンパシーとは何か」という問題の答え。エンパシーは「他人の感情や経験などを理解する能力」のこと。「EU離脱や、テロリズムの問題や、世界中で起きているいろんな困難を僕らが乗り越えていくには、自分とは違う立場の人々や、自分と違う意見を持つ人々の気持ちを想像してみることが大事なんだって」

シチズンシップ・エデュケーションはイギリスの公立学校では導入が義務付けられ、中学生には「議会制民主主義や自由の概念、政党の役割、法の本質や司法制度、市民活動、予算の重要性」などがカリキュラムされている。

彼の住む地域の公立中学校ランキングでトップはカトリック校なんだけど、オックスブリッジに行くようなエリートを教えているクラスの後ろの方では何も聞いていない生徒たちがダラダラとほっておかれている（教室内前後格差）。廊下にはみ出してついていけない生徒たちを別の教師が教えている元底辺校を彼は選んで入学した。入学するとき一年生でミュージカル「アラジン」を上演するのだけれど、ハンガリー系の移民の美少年ダニエルが主役を射止めます。著者の息子は映画で菊地凜子さんの息子役をやったことがあるくらいなので演技力は問題なく、ジーニーを演じることになるのですが、ダニエルは息子のことを東洋人だから「春巻きがノドにつまったような声」とか黒人の少女のこともモンキーといって馬鹿にして、嫌われます。練習をしているうちに歩み寄って、友だちになるのですが、彼の人種差別的な部分が教師たちの間で問題にされ、子どもたちがいじめられるようになってしましますが、それでも息子は見捨てない。

差別が生まれるのは「無知だから」と著者である母は語ります。「多様性はめんどくさいけど、無知を減らすからいいことなんだと思う。息子や息子が語る学校の子どもたちの話を聞いていると、たとえブレグジットのような大変なことが起きたとしても、長い目で見ればイギリスは大丈夫だろうと思えるんです。あの子たちの世代が自分たちで考えて、また世の中を変えていくだろうと」何度ぶつかっても理解し合うことを諦めない子どもたちの姿を描いているこの本。あきらめがちな大人の感覚をひっくり返してくれました。

息子の友だちは自らのジェンダーを「クエスチョニング＝異性が好きか同性がすきか、それともそういう感覚がないのか、まだわからない」とさらりと話すし、貧困家庭の子どもにリサイクルの制服を渡すとき、母親が相手が貧乏だと傷つけずに渡すにはどうしたらいいか悩んでいるときにさっと渡しちゃった「ぼく」がかけた言葉は、「君はぼくの友だちだから」とケロリとしている。

イギリス社会の貧困だってひどい。学校の女子トイレにメーカーから供給させた生理用品を置いたら、あっという間になくなった。買えないから生理の間は登校しない子がいる。一方で、メーカーに掛け合って問題解決しようとする人たちもいる。

上記のいじめられっこダニエルくんと映画「ボヘミアン・ラプソディ」を見に行くシーン、環境問題のデモに自分の学校は参加を許してくれなくてむくれるシーン（イギリスには子どもを正当な理由なく欠席させた場合、罰金があるんです！！）、公立と私立には大きな壁があって、水泳大会をやっても圧倒的にメダルをもらうのは私立なんだけど、まれににその大きな壁を乗り越える天才が現れて、下に見られている公立層の周囲を熱狂させてしまう場面など見どころいっぱいの毎日。

スウェーデン国会の外で抗議を始め、わずか1年で国連の気候行動サミットで演説をして世界各国首脳に説教することができるグレタ・トゥンベリさんだってまだ16歳。ひどい現実を見せられてうんざりしていても、未来はもしかしたら変えていけるかもしれない。おとなとしては子どもたちのことを決して見くびってはいけないと思わせてくれる作品でした。

でもこの息子さん、おおらかなのかと思ったら、母とスニーカーを買いに店に入ったとたんスマホでチェックして、すぐに「やべ。母ちゃんここ出よう」と。「同じクラスの女子たちが二階にいる。母親と一緒に買い物してるところなんて見られたくない。ダサすぎる」とそそくさと出て行ったりするお年頃の男の子であることもほほえましい。

